

# 「私とチャペルとオルガンと ～明治学院礼拝堂献堂100年に寄せて」

小杉義信(社会福祉学科1982年卒)

このたび私にとっては職員の大先輩であるF氏より明治学院礼拝堂献堂(以下、チャペルと記します。)100年記念に寄せて、一文を書いて欲しいとの依頼がありました。

チャペルが建造物としての価値においても、建学の精神の「象徴」であることにおいても重要なものであると本当に理解することができたのは大学勤務員となり、明治学院歴史資料館に勤務してからと言っても過言ではありません。そのようなチャペルと私の学生時代を重ね合わせながら、チャペルへの想いを書かせて頂きます。

## ヴォーリズ設計による現チャペル献堂

周知のように現在のチャペルは明治学院の歴史の中では3代目のチャペルです。

1903(明治36)年建築のミラー記念礼拝堂が度重なる地震のため地盤沈下し破損し危険となったため、サンダム館2階の講堂が礼拝堂として使用されていた。ところが、1914(大正3)年11月24日にこのサンダム館も火災のため焼失し、学院は礼拝を行なう場所を失った。そこで礼拝堂の建築が急がれた。(中略)ミラー記念礼拝堂の前例があるので、特に基礎工事を堅固にし、1915(大正4)年11月30日に定礎式を行い、当時来日中のプレスビテリアン外国伝道局主事スピーア博士が礎石をすえた。工事は順調に進行し、翌1916(大正5)年3月に落成した。同月27日には卒業式を兼ねて献堂式が行なわれた。建築様式は英国式、設計はヴォーリズ合名会社(建築設計事務所)であった。

と明治学院歴史資料館ホームページでチャペルの来歴が記されています。チャペルが当時の明治学院関係者の篤い祈りの中から誕生したことを献堂100年の節目の時に改めて思い起こして、心に刻みたいと思います。(などと、格好良い?ことを書いていますが、学生時代にはこうしたことを知るよしもなく、職員になってからも歴史資料館で仕事するまでは意識していませんでした。)

## 私とチャペルアワー

クリスチャンである私にとってチャペルは身近な存在でした。私の学生時代にはチャペルアワーが1時限目と2時限目の間に設けられていました。1時限目のあるときは1時限目が終わってから、1時限目のないときはチャペルアワーに間に合うように、チャペルに足を向けたものです。今もそうですが、私の学生時代にはチャペルアワーに参加する学生が激減していました。あの広いチャペルの中に、数人、多くても10数人という感じだったのでしょうか。「こんなに広いチャペルにたった数人・・・。」と寂しいと言うか、残念と言うか学生の身ながら複雑な思いを抱きました。それでも当時、意外?であったのは英語礼拝になると結構多くの学生が集まってきたことです。毎週火曜日が英語礼拝だったと思います。この英語礼拝になるチャペルアワーに参加するする人数が、増えるのです。チャペルアワーの入り口に列が出来るほどでした。今時の学生は英語礼拝と分かると、尻込みして、チャペルの入り口まで来ているのに、「出直します・・・。」と引き返す有様です。そう思うと隔世の感があります。

英語礼拝では宣教師として来学し、教鞭も執っておられた先生がたがメッセージをされました。Native speakerの先生が話す英語を100%分かったなどとは言えませんが、ミッションスクールの薫りを肌で感じる時でした。ヴァン・ワイク先生、ドラモンド先生など懐かしいお名前が思い出されます。ヴァン・ワイク先生と言えば、ミセス・ヴァン・ワイクから英会話(英語Ⅲ)を教えて頂きました。ミセスが体調を崩された時には、ミスター・ヴァン・ワイクが教室に現れ、「今日は妻が体調を崩したから、私が授業をする。」と授業をされ、月曜1時限の授業は1回も休講とならなかったことも懐かしい思い出です。ヴァン・ワイク先生ご夫妻の仲睦まじい姿は印象に残っています。

チャペルアワーのことを語る時、忘れてはならないのが三浦正雄さんです。チャペルアワー前に、トラメガを肩から提げて、「今日のチャペルアワーは・・・。」と構内を歩かれていました。それこそ雨の日も、風の日もです。その案内は三浦さんが定年退職されるまで続きました。このことができたのは、後にも先にも三浦さんのみでした。

## 私とオルガン

私にとってチャペルのオルガンといえば、チャペル正面に据えられた、天使が羽を広げたような姿のオルガンです。入学式で初めて聴いたオルガンの音色は圧倒的な迫力で、チャペル内の空気全体が震えるような感じに思えました。その感動を忘れることはありません。毎日のチャペルアワーでもこのオルガンで奏楽がされていましたから、チャペルアワーに参加する理由にはオルガンの音色を聴きたかったというのも、半分はあったでしょうか。それほどチャペルのオルガンは



私に魅力的な楽器でした。そんな訳ですから、「あのオルガンを弾いてみたいなあ・・・。」と思うようになりました。鍵盤楽器には幼い頃から親しむ機会がありましたが、オルガンは遠くから眺めるもの、音楽鑑賞のレコード（私の学生時代はですよ・・・）で聴くものという「雲の上」のような楽器です。その楽器が手を伸ばせば届くような目の前にあるのです。“夢”を見るのも当然です。ところが、その夢が叶ってしまったのです。どんな経緯があったのか、記憶が定かではないのですが、2年生になった頃だったのでしょうか、「オルガンを練習してみませんか？」とお声がかかったのです。マジ!?と思いました。さすがに頬をつねる様なことはしませんでした。驚きとともに嬉しい気持ちになりました。遠くから眺めるだけと思っていたオルガン、本物のオルガンに手が届いたのです。

私にオルガンの手ほどきをしてくだっただのは園部順夫先生です。園部先生は高校の礼拝、大学のチャペルアワーで奏楽の任を忠実に果たされていました。その多忙な合間で私にオルガンの初歩を教えてくださいました。初めて練習の時、オルガンの演奏席で緊張の私に園部先生は「何でも良いから讃美歌を弾いてみて。」と言われました。「あ、はい・・・。」と言って、私の愛唱讃美歌の一つを弾いてみました。私を包みこんでくれるようなオルガンの音色に感動しました。「あ、ホントにこのオルガンを弾いている。」との実感が湧いてきました。誠に申し訳ない限りですが、園部先生が何とコメントしてくださったのか全く覚えていません。それが私とオルガンとチャペルの初めて物語りです。

こうして私とオルガンが結びついて、園部先生に代わってチャペルアワーで奏楽をさせて頂く機会も生まれました。学生の身分で、専門的な教育を受けていない「素人」が、本物のオルガンで、大学チャペルアワーという公的な場で奏楽をさせて頂くというのは、今から思うと随分と身分不相応なこと・・・と怖くなります。

私のチャペルとオルガンの思い出の中にはチョー・ハプニングが2回ほどありました。特に1回目のハプニングは想定外、リスク管理の対象外とも言えるハプニング。今、思うと、あのハプニングによくぞ対応できたと思います。一言で言えば、私の人生で一度きりのチョー貴重体験、アンビリバボー体験です。この体験談は、機会があったら別のときに書きましょう。そのオルガンも役目を終えて、2009年に現在のオルガンが奉献されました。

こうして、チャペルアワーとオルガンは私のチャペルに関わる思い出に深く結びついています。ヴォーリズが設計したチャペルが献堂されて100年。今もチャペルは学生一人ひとりの心に語りかける場になっています。私たちの心にも語りかけ、その記憶の中にとどまっているように。